

学校教育における母子保健に関する知識・情報の 習得状況について

(分担研究：母子保健における情報の整理と育児への応用)

近藤 洋子

要約：学校教育の中で母子保健や育児に関する知識や情報がどのように教授され、児童・生徒・学生により習得されているかについての現状を明らかにすることを目的とし、大学生等を対象とした保健や育児に関する知識習得状況や育児経験の実態調査を行った。その結果、教科における学習が知識の定着を促すとともに、育児経験の機会と知識の習得状況の間には関連性が考えられた。

見出し語：保健教育、保健知識、育児情報、育児経験

I. はじめに

現代は情報化社会であり、母子保健や育児をめぐる情報は日々変化しつつ氾濫している。将来親となり子育てを担う世代である児童・生徒・学生においては、自己の健康管理はもとより、育児を前提とした正しい保健知識の習得や健康に関する情報の取捨選択能力の養成が重要な課題であるといえる。また、親準備性や生命尊重教育の一環として、実際の育児を体験する必要性も強調されてきている。

一方、現行の学校教育では、健康や育児に関す

る内容は主として保健と家庭科の授業においてとり扱われているが、受験科目でない保健や家庭科は、ともすると他の教科に比較して授業をする側とされる側双方から軽視されがちであり、必ずしも授業内容が充実しているとはいえない傾向があるとされている。そこで、本研究では、高校までの学校教育における母子保健や育児に関する知識や情報の習得状況や育児経験の現状を明らかにすることを目的とし、短大・大学生等を対象に実態調査を行った。

玉川大学文学部教育学科

II. 対象と方法

対象は、短大(1校・318名)、大学(3校・765名)、看護学校(1校・222名)の第1学年に在籍する学生合計1,305名であり、女子1,140名、男子159名、不明6名である。調査票を授業中に配布し、その場で記入させ回収した。調査期間は、1年次の前期中である平成5年と6年の5～7月とした。

調査票の内容は、家庭や出身高校の状況、高校における保健および家庭科の履修状況(授業の形態や内容、授業担当者)、保健・育児情報の入手先、習得知識の正確度(母性・小児保健、保育、救急処置に関する内容)、実際の育児経験等についてである。

III. 結果

1. 学生の背景

出身高校は、公立61.9%、私立36.7%であり、普通科93.3%、専門科5.5%である。男女共学67.6%、女子校28.1%、男子校1.9%であり、地域別分布は北海道・東北6.0%、関東55.2%、中部7.1%、近畿20.4%、中国2.1%、四国1.1%、九州・沖縄1.5%である。

2. 保健の履修状況

全体の2.5%が高校で保健を履修していなかった。3年間のうちで2年間授業のあったものが57.5%と最も多く、そのうちの90.7%は1・2年での履修であった。単一学年のみは28.2%、3学年通しては11.3%であった。教科書の終了状況については、すべて学習し終わったものは7.1%であり、殆ど終了し

たものが47.1%、一部しか終わらなかったもの36.7%であった。

3. 家庭科の履修状況

家庭科履修については、全体の12.6%、女子の0.9%、男子の95.0%が高校では家庭科を履修していなかった。男子159名のうち家庭科を履修していたのは6名のみであった。3年間のうちで2年間授業のあったものが58.6%と最も多く、3学年通してが17.9%、単一学年のみが10.4%であった。2年間授業のあった場合の92.2%は1・2年で履修していた。男女一緒の授業であったものは26人(2.3%)のみであった。教科書の終了状況については、すべて学習し終わったものは4.9%であり、殆ど終了したものが52.9%、一部しか終わらなかったもの32.6%であった。

4. 育児の経験

これまでの育児経験について、赤ちゃんのかわりの経験を「母乳を飲ませているのをみたことがある」「赤ちゃんの便をみたことがある」「抱っこ、おむつ替え・着替えをさせる」「離乳食を食べさせる」の5項目について具体的に問う形式で質問した。経験した時期別の経験率を図1に示した。最も経験率の高かった項目は「抱っこ」80.1%であり、最も少なかったのは「離乳食」25.8%であった。いずれの項目も男子より女子の方が経験率が高かった。半数以上は幼児期から小・中学生期の経験であり、高校および高校卒業以降に経験したものは全体の1～3割と少なかった。

これらの育児経験の有無と子どもの捉え方との

関連では、育児経験ありの場合に泣き声をかわい
いと捉えるもの（図2）や、友人と育児の話をす
る機会があるもの（図3）の割合が高い傾向がみ
られた。

5. 習得知識の状況について

学生が現在持っている知識の正確度を調べるた
め、母子保健・小児保健・育児・救急処置など
に関する○×で回答する設問を29項目設け、個人別
に正答数を合計した結果、平均値は全体19.48(SD
=2.89)、女子19.70(SD=2.82)、男子17.94(2.94)で
あった。

次に、女子のみについて正答数と他の項目との
関連を検討した。教科の履修状況との関連を図4
に示した。私立より公立高校の場合、保健の授業
を非履修より履修の場合、家庭科担当者が専任の
教員の場合に正答数20問以上の割合が高い傾向が
認められたが、有意差が認められたのは家庭科の
担当者についてのみであった。

一方、育児経験の時期を、高校以降の場合、中
学以前の場合、経験なしの3群に分けて正答数20
問以上の割合を比較した結果（図5）、母乳から
おむつ・着替えまでの項目において、高校以降に
経験した群で最も高く、次いで中学以前に経験し
た群、経験なし群の順に、正答数20問以上の割合
が高い傾向が認められた。

IV. 考察

保健や育児に関する内容を取り扱う保健および
家庭科の履修状況については、高校では女子の場

合は9割以上が履修していた。しかしながら、教
科書の終了率については3分の1以上は一部しか
終わらなかったとしており、履修範囲は必ずしも
教育課程全般にわたっているとはいえない様であ
る。一方、育児経験の実態は、対象の学生のうち
抱っこの経験や母乳を飲ませるのをみた経験があ
るものは7割以上であったが、多くは中学以前の
経験であり、自分の弟や妹の世話の記憶も含まれ
ていると思われ、高校以降の経験率は1～3割と
少なかった。

育児経験と子ども観や親準備性との関連は以前
から指摘されているが、本調査においても抱っこ
など赤ちゃんに触れたり、世話をしたことのある
群において泣き声をポジティブに捉えたり、育児
について友達と話す機会をもつものの割合が高く、
赤ちゃんとの接触の経験は、その後の子どもの捉
え方を受容的にすることが考えられた。

また、保健・育児知識の正答数と他項目との関
連では、保健の授業を履修した場合や専任教員に
教えられた場合、および育児経験ありの場合に正
答数が多い傾向がみられた。教科における学習が
知識の定着を促す事は当然であるが、さらに子育て
について身近に経験する機会が多いことと、知
識の習得の間には関連性が考えられた。現在、思
春期における保健・福祉体験事業が実施されはじ
めているが、このように初等・中等教育に実際の
育児体験等を取り入れることは、前述のように望
ましい子ども観・育児観を形成するだけでなく、
母子保健や育児への関心を高め、正確な知識の習
得を促すことにもつながると考えられる。

図1. 育児経験ありの割合とその時期 (全体 N=1,305)

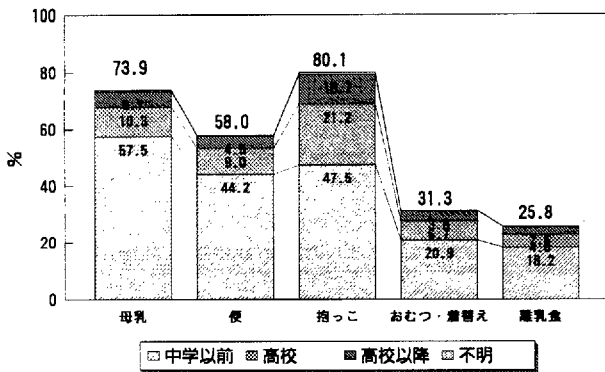


図4. 教科の履修状況と正答数 (正答数20問以上の割合)

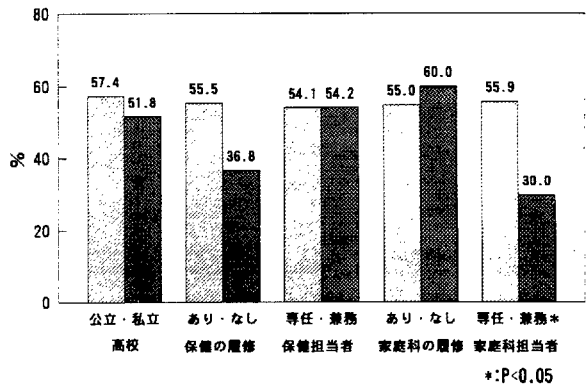


図2. 育児経験と泣き声の捉え方 (離乳食を与えた経験別・女子)

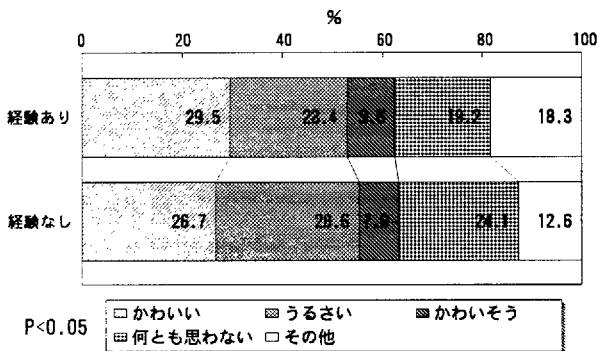


図5. 育児経験の時期と正答数 (正答数20問以上の割合)

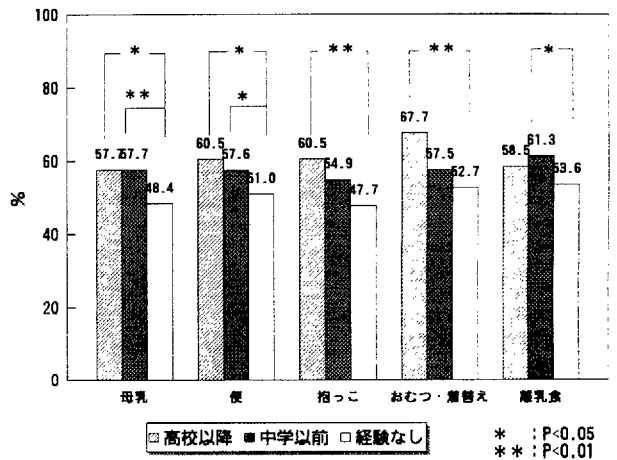
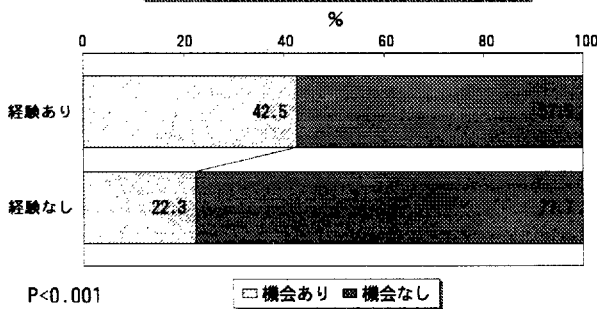


図3. 育児経験と育児について話す機会 (抱っこした経験別・女子)





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:学校教育の中で母子保健や育児に関する知識や情報がどのように教授され、児童・生徒・学生により習得されているかについての現状を明らかにすることを目的とし、大学生等を対象とした保健や育児に関する知識習得状況や育児経験の実態調査を行った。その結果、教科における学習が知識の定着を促すとともに、育児経験の機会と知識の習得状況の間には関連性が考えられた。